

「講義要綱」における 仮名本語と原語の綴りとの関係について (2)

POPESCU Florin

一. はじめに

「講義要綱」と呼ばれるキリシタン写本は、ヴァチカン図書館に所蔵のラテン語版と、オックスフォード大学図書館に所蔵の日本語版がある。拙稿「『講義要綱』の成立について」⁽¹⁾（以下、「成立について」と略称する）では、ラテン語版は1594年以降書写されたものであって、日本語版は1595年以降書写されたものであることを指摘した。

日本語版に二万語以上の「本語」（和文中にラテン語やポルトガル語などで出てくる語）があつて、表記の仕方から、これらはローマ字本語、仮名本語、合字（ローマ字による合成字）本語、漢字本語の四種類に分けられる。

拙稿「『講義要綱』における仮名書きの本語について」⁽²⁾（以下、「仮名本語について」と略称する）では、仮名本語の揺れのもととなった原因を三種類に分けた。それは、一つには誤写に基づくであろう誤字・脱字・衍字、二つには誤写ではない仮名表記の問題、三つには、もととする言語の相違である。拙稿では最初の二種類を検討した結果、本語が表記されている形はローマ字の綴りをもとにしているのではなく、原語の発音の形をもとにしているものであることを明らかにした。また、ラテン語から和訳を行ったヨーロッパ人グループと筆記作業を中心に行った日本人グループという仮の状況を考え、和訳者はラモン師一人ではないかと考えた。そして仮名本語に原語のアクセントなど、発音の要素が入っていることから考察し、和訳作業はラモン師によってなされ、筆記作業には日本人と共に、ヨーロッパ人宣教師が携わって、本語の発音を提供したのではないかという結論に至った。ただし、このヨーロッパ人はラモン師

自身であったかどうかは分からない。

同じ拙稿で指摘したように、日本語版の中に出てくる仮名本語は、64.5%がポルトガル語、11.9%がラテン語の形、15%程度がラテン語とポルトガル語と共通している形、残りはラテン語とポルトガル語にない形である。それらの語には、スペイン語に近い形がある。またアツト、エヘット、スカンタロのように、スペイン語やポルトガル語にない形があるが、これらの表記にちなんだ発音を強いて探してみると、イタリア語にある場合がある。

本稿では、ラテン語とポルトガル語にない語を中心にして検討する。拙稿「講義要綱」における仮名本語と原語の綴りとの関係について⁽¹⁾（以下「綴りとの関係について」と略称する）では系統的な変化の中で、ラテン語をもとにしている語を取り扱った。そのとき、エスヒリシテなどは、ポルトガル語に存在しないため、ラテン語 *explicite*（明言されているさま）の仮名表記であると考えておいた。しかし、*explicite*の標準ラテン語の発音から推定される仮名表記は「エキスピリチテ」であり、これを実際の仮名表記と比較すると、日本語版では子音連続xが仮名文字「ス」に簡略化され、破擦音であるはずのciが摩擦音「シ」として表記される。また「アツツス・ヒリムス・ススタンシアリス」は、語形からラテン語 *actus primus substantialis*（第一の物質的所作）をもとにしていることは明らかなが、標準ラテン語の発音から推定される仮名表記は「アクツス・ピリムス・スブスタンチアリス」のようなものとなる。推定表記から見ると、子音連続ctの前項cは破裂音「ク」に表記されると予想されるが、実際には「ツ」（破擦音、もしくは促音）に表記されていることになる。また、子音連続bstにおいて、推定表記ブスタがスタに表記されており、前項bが簡略化されていることになる。さらに、tiはチではなくシとなっており、摩擦音表記が行われていることになる。

エスヒリシテとアツツス・ヒリムス・ススタンシアリスのような例では、ラテン語の綴りが厳密には反映されていないが、中世の諸ロマンス語と形を異にしているため、もとの形がラテン語であると比定できる。以下は、このような表現を主に考察することによって、もとの綴りが分かりにくい語の様子を解明してゆく。

二. いくつかの子音連続の表記について

16世紀のラテン語は中世後期語とされている。拙稿「『講義要綱』におけるローマ字書きの本語について」⁽⁴⁾（以下「ローマ字本語について」と略称する）でも見たように、この時期のラテン語は、古典的ラテン語と比べると相違点がある。国原吉之助氏『中世ラテン語入門』にある、中世ラテン語表記の混乱に対するまとめを以下にあげる。

「e=æ, e=œ; f=ph, t=th, c=ch; i= i, c=qu, ci=ti, d=t, x=s, honor=onor, 子音重複などの混同は、MLのほぼ全期を通じて見られる。」⁽⁵⁾

同書によると、それらの混同がもっとも著しいのは、ロマンス語が俗ラテン語から形成された時期（8世紀）までである。カロリング時代、古典ラテン語に復帰する傾向がみられ、後期には再び乱れ始めるが、前期ほどではないということである。

また、これらの混乱は程度が文献によって異なっており、16世紀の科学書や神学書にはそう頻繁に起こるものではない。ラテン語版でも、また日本語版におけるラテン語の引用文でも、誤写は見られるものの、このような混乱はほとんど見られない。

ラテン語では、基本的に発音は一字に対して一音である。当時の文法資料において「consona muta」と呼ばれる破裂音⁽⁶⁾が二つ連続して、かつそれらを分かち書きにしなければならないときには、その間で分けて、二つの音節であることを示すことになっている。すなわち、子音連続の前項をもった音節が破裂音に終わることになる。ポルトガル語では、そうではない。Oliveyraの「ポルトガル語文法」（1536）では、

(A) A nossa lingua não cõsinte acabar as nossas syllabas em .c. nem em outra alghũa letra muda.⁽⁷⁾

（我が言葉ポルトガル語は、音節がcや他の破裂音に終わることを承知しない）

つまり、破裂音の子音が表記では連続するとしても、音節が破裂音で終止しない。

日本語については、ロドリゲス日本大文典に次の記述がある：

(B) Toda a syllaba, acaba em vogal ou na consoantes N, M, T ⁽⁸⁾（日本語ではすべての音節は母音もしくはn、m、tのいずれかに終わる）。

つまり、当時のキリシタン宣教師にとって、入声音は破裂音に終わる唯一の音節としてとらえられていたのである。ポルトガル語は、破裂音に終わる音節

がないという (A) の記述を考慮に入れると、破裂音に終わる音節がたくさんあるラテン語より、日本人にとって聞きやすく、写しやすかったのだろう。また、原語の綴りが厳密に仮名表記されていたなら、子音連続の各項に対して仮名の一文字が当てられるはずで、多くの場合にラテン語とポルトガル語との相違点が明白になるだろうが、実際の表記では揺れが多くて、語形全体からラテン語かポルトガル語か区別しにくいことが多い。以下はいくつかの子音連続を取り上げてゆく。

二・1 -ct- (directa, intellectus)

国原氏『中世ラテン語入門』には、「子音の弱音化・脱落」として、次のc脱落現象が紹介される (p.46)。

(C) Nct>nt santus(<sanctus), defuntus (<defunctus)

Ct>t autor(<auctor), autoritas (<auctoritas)

ポルトガル語におけるこの連続子音に関して、Oliveyraの記述 (A) とともに、Gandavoの「ポルトガル語の書き方と正書法に関する規則」(1576年)に、次の記述がある。

(D) E tambem esta letra c, pelo consequente em tal caso nunca se apartara do t, assi como san=cta, conje=ctura, vi=ctoria, &c. Ainda que nesta nossa linguagem pela corrupção dos vocabulos, vsão muita pocas vezes, ou quasi nunca de c, ante t: mas quando o vocabulo o tem de sua origem, & assi inteiramente foi vsurpado do latim pera nosso vso, nao sera desnecessario, nem inconueniente vsallo (como algũs querem dizer)……⁽⁹⁾ (したがって、この文字cは、そのような場合にtと分裂することはないわけである。例えば、(…) もつとも、我が言葉は単語 (の形) を崩しているため、tの前にcを用いることは稀で、ほとんどないことである。しかし、ある語がそれを語源から有する時、それはこの語がラテン語から我々が使用するために完全に借用されたということなのだが、cを用いることは (ある者がいうように) 必要でも、不便でもない。)

以上の記述は、正書法に関するもので、ctが現れるときの音節の分け方について述べているが、“nossa linguagem(…) usa pocas vezes(…) de c, ante t” (tの前にcを用いることは稀で、ほとんどないことである)” というのは、発音され

る場合のことであろう。なぜなら、ctを含む語は現在でも決して少なくなく、ctがほとんど存在しないはずはないからである。

また、“quando o vocabulo o tem de sua origem (…) não sera desnecessario vsallo”（ある語がそれを語源から有する時（中略）、cを用いることは不必要でもない）というのは、おそらくポルトガル語に受け入れられて間もない、ラテン語の感覚を残している語を表記する場面を指している。ところで、ラテン語ではctのような破裂音の子音連続はcとtの間で二音節に分かれることになっていることを考慮すると、ラテン語の綴りのままポルトガル語に借用した語の場合cとtを分けないという、ラテン語と異なった規則が成立し得るのは、ポルトガル語ではcが発音されていなかったからに違いない。

つまり当時、表記の上では、ctのcを記すかどうかについてはそれぞれの書き手の主観に任せられた部分があっただろうが、発音上では、ポルトガル語にラテン語の言葉が受け入れられる時に、cが発音されなかった可能性が高い。

実際に、当時の資料で、単語がラテン語からポルトガル語に借用されるときは、連続子音ctの前項cが表記上でも取り去られることが多い。日本語版や他のキリシタン資料によく出てくる語を二三あげる。

例： doctor,-es→doutor,-es 第一章で見た誤字脱字や揺れが見られるが、ドトウル（45例）とドトウレス（85例）が中心的である。

lector→leitor（レイトウル（1例））

instinctus→instinto（インスチント（6例））

この面では、ctが発音されるラテン語よりも、cを発音しないポルトガル語の方が、開音節しか存在しない日本語の感覚に近いわけである。

以下の表に出てくる表現には明らかにラテン語の語形をした、ctを含む語をまとめた。

表1 連続子音ct中のcの表記例

番号	日本語版の例	羅語表記	葡語表記	西語表記	cの表記
1	コアクタ・ヒイテス	co <u>a</u> cta fides	(coacta) fe	coacta fe	ク
2	イノランシアヘクタ アタ	ignorantia affectata	ignorancia afeitada	ignorancia afectada	ク
3	デレキテ	direct <u>e</u>	diretamente	directamente	キ
4	インチレキテ	indirect <u>e</u>	indiretamente	indirectamente	キ
5	ヘルデヘキツンカラシ	per defectum causi	pelo defeito da causa	por lo defecto dela causa	キ
6	ヘルチスツルクシヤウ ネスマテリエ	per destructiones materiæ	pela destruição da materia	por la destruccion dela materia	ク
7	ヘルチスツルクシヤウ ネスノレシユン	per destructiones partium	pela destruição des partes	por la destruc- cion des partes	ク
8	ヘルチスツルクシヤウ ネススハウシチ	per destructiones suppositi	pela destruição do supposito	por la destruc- cion delos supositos	ク
9	アクタApoルン アツタApoルン	Acta Apostolorum	使用されない、	使用されない、	ク 促音
10	アツツス・ヒリムス・ ススタンシアリス	actus primus substantialis	acto primo sustancial	acto primo substantial	促音
11	インテレツツアル	intelect <u>u</u> alis,-e	inteletual	intelectual	促音
12	コレツシヨ	correctio	coreição	coreccion	促音
13	シルクンスヘツシヨ	circumspectio	circumspeção	circumspeccion	促音
14	ヒンヂツタ ヒンヂタ	vindicta	vindita	vindicta	なし 促音
15	アヘシヨウネス	affectio,-nes	afeição,es	afecciones	なし
16	インテレツス	intellectus	entendimento	entendimiento	なし
17	ヒイテスノンヒエタ	fides non ficta	fe não feita	fe que no es feita	エ

表1の語は拙稿「綴りととの関係について」(p.15)で指摘したように、難解な構文で和訳しにくいと、ラテン語のままに仮名表記されている。これらの中にある子音連続ctのcを仮名で表記するには三つの方法が見られる。

(1) カ行音が用いられる方法。

(2) cを促音に変換する方法。(12、13の例では、ツがサ行音に先行するため、ツをタ行音でないと考えるべきである)

(3) 全く表記しない方法。

(1) の表記法はラテン語の子音の発音を最も厳密に反映している。ctのcがカ行音として表記されている語は、全体で16語(延べ58例)あるが、その中で元の綴りがラテン語のものは表1の7語(延べ7例)である。残りはcが読まれてはいるが、語末はポルトガル語のようになっている。

例：オブセクト (ポojeito、ラobjectum)

スフゼクト (ボsujeto、ラsubjectum)

(2) の表記法も、ラテン語のcの発音を表しているといえよう。確かに、促音の音価に近い音声がある言語を強いて探せば、atto, efettoなど、二重子音を有するイタリア語があるが、拙稿「仮名本語について」(p.17)で筆記作業グループの構成を考えたと同様に、このイタリア語風の表記の原因をヨーロッパ人グループに求めるよりも、本語の発音の形を筆記した日本人にあると考えた方がよいだろう。

そもそも、日本語は子音連続を持たないため、日本人にとっては、ctのcは聞き難かったはずである。ヨーロッパ人はこれらの本語を音節にはっきり分けて発音した——たとえば、表1の5語目のdefectumをde-fec-tumと分けた——としても、音節-fec-の最後にあるcは入声「ヘツ」に聞こえたと十分考えられる。(1)のカ行音は破裂音cの音価を保存したものであるのに対し、cを促音と表記するのは、入声が入文字で一拍となることを考慮すれば、ラテン語の発音のリズムをより厳密に写したものであるといえよう。

この表記法が見られるのは全体で12語(延べ101例)ある。この中で、cの読み方以外ラテン語である表1の5語があつて、cの読み方以外ポルトガル語である語が3語ある。

(3) の表記法では、ラテン語がポルトガル語であるかのように反映されていると考えることもできるが、単にcが筆者に聞こえなかったこと、もしくは

は無表記となっていることも考えられる。表4の語の他に、cがtの前にあればラテン語もしくはスペイン語、なければポルトガル語の綴りに当たる語は全体で22語（延べ62例）ある。

ctの表記に二種類以上の揺れが見られるものは13語ある。揺れが生じる丁を見ることにした。

327ウにアクチヲ（ラactivus,-m,-a、ポativo,-a、スactivo）の2例の後にアツチヲが1例出てくる。

ラテン語delectatio（ポdeleitação、スdelectacion）に関しては、デレクタサン（1例）の後に、テレッタサン（8例）とテレイタサン（8例）の例が356オ～360ウの間で入り交じっている。

表記の揺れが非常に狭い範囲で見られることから、その原因を翻訳作業が行われた時期が違ったというところに求めることも、また複数の言語を母国語とするヨーロッパ人が発音を提供したというところに求めることも合理的でない。どちらも、4-5丁の間の揺れの原因ではなさそうである（この短い間で翻訳時期が入り乱れているとは考えにくい）。

また、アクチヲやアツチヲ、デレクタサン、テレッタサン、テレイタサンの例に関しては、語尾の形から見るとポルトガル語風になっているが、連続子音ctのcが表記されている例と表記されていない例とがある。cが表記されていない例をポルトガル語と見ることもできるが、逆に見ればcが表記されている例はラテン語と語尾しか変わらないことになる。activoの3例の全てにおいて、deleitaçãoの全17例中、9例においてcが表記されており、ctが表記されている例は少なくないことから、これらの語が発音された形は、語中をラテン語、もしくはスペイン語のまま、語尾をポルトガル語風に変えたものであったと考えられる。

つまり、ctのcが複数の表記になっているのは、ヨーロッパ人が提供したラテン語のような発音に、日本人の筆記者が聞き慣れない連続子音があり、これを、揺れをもって筆記したためであろう。

二・2 -bst- (substantia, abstinentia)

ラテン語においてbstを含む表現を見ると、9種類で48例あるが、単語として

は、次のものがある。

アフスチネンシア（ラobstinentia禁欲、5例）、アウスチネンシア（2例）、
アブス——（1例）

オスチナサン（ラobstinatio、ポoustinação、強情、1例）

ススタンシア（ラsubstantia、ポsustancia、物質、27例）

ススタンシアル、ススタンシアリス（物質的、12例）

この連続子音を含む語はラテン語においてもさほど多くないが、ポルトガル語では早期に受け入れられて使用頻度の比較的多い語ではbがuに弱化し、もしくは完全になくなる場合が多く、比較的に新しく受け入れられた語だけがラテン語の形をそのまま保っている。スペイン語では、この連続子音は殆どの場合に残っている。

「ススタンシアリス」は「アツツス・ヒリムス・ススタンシアリス」(actus primus substantialis, 第一の物質的所作) という明らかなラテン語の表現の中に含まれており、語尾を見てもラテン語の綴りをもとにしているものである。しかし、本稿の最初に見たように、子音連続bstの表記には子音bが反映されていない。つまりこのラテン語はポルトガル語sustancial（推定仮名表記はススタンシアル）と語尾だけを異にして表記されているのである。

オスチナサンの一例は語中と語尾ともにポルトガル語のものになっている。

これらの例の中で、bstの3子音とも表記に反映されているのはアフスチネンシア、そしておそらくアブス——だけであるが、アウスチネンシアとなっている2例以外はラテン語の連続子音は仮名に反映されていることが分かる。つまり、このbstに対して、少なくとも一回、外国人側はそれぞれの子音がはっきりと区別できるラテン語（もしくはスペイン語）に近い形を提示したのであろう。ポルトガル語に似た崩れや揺れは、子音連続が聞き難かった日本人の筆者によるのではないかと考えられる。

二・3 x (luxuria, mixto, experientia, explicite)

ロドリゲス大文典において、日本語をローマ字表記する際に用いられるxの発音について、これが「ポルトガルの発音に似たもので、ラテン語のcsの連続子音ではなく、ヨーロッパの他の地域における喉咽音のようなものでもない」という記述がある¹⁰⁰。もちろんロドリゲスの記述の対象になるのはxで始まるxV

(x+母音)の音節で、そのポルトガル語における発音は[ʃ] (まれに有声音の[ʒ])なのであるが、語尾もしくは子音に先行する場合xは[s]と発音される。スペイン語でも同じ発音である。それに対して、ラテン語ではどの位置にある場合にも[ks]と発音される。

日本語版では、ラテン語においてxが含まれる表現は27個で延べ数323例ある。xVの場合が9語(延べ170例)で、この内3語は現代ポルトガル語でも希少な語で、当時のポルトガル語資料に見られない。しかし、そのすべての表記に[k]にあたる文字(カ行音)が見られず、ポルトガル語風に表記されているのである。

例: ルシユリア (luxuria ラ・ポ共通、性欲)

エゼンフロ (exemplo ポ、例)

xが語尾、もしくはxC (x+子音)の環境にある19語では、ラテン語式の発音を写した例はexpliciteの1語だけである。

この語の例を少し考える。この語は次の形で出てくる。

explicite (2) エクスヒリシテ (1)、エスヒ (ビ、ピ) リシテ (19)、エスヒ (ビ、ピ) リシテ (10)、エスヒリシイテ、エスヒー (それぞれ1例ずつ)

これらの例の中で、xplの子音連続が発音されるラテン語を反映する例はエクスヒリシテの一例のみである。この形はポルトガル語にないため (explicitamenteとなっている)、もともっている語をラテン語と見るべきであろう。この概念は集中的に多用される用語で、最初に79vにおいてローマ字表記で紹介された後、上記の表記揺れをもって88vまでの10丁の間に32回出てきて、その他には一切出てこない (つまり、出現箇所が離れているから揺れが出ているのではない)。xのラテン語における発音を反映したエクスヒリシテという仮名表記はこの10丁のほぼ真中の85rに出てくる。

仮にラテン語を反映した発音の例が最初に出ていたとすれば、ヨーロッパ人宣教師が最初に新概念を紹介する際、語形をもっとも厳密に提供して、使用する内に表記が雑になったというような解釈もつくだらうが、32回の間で真中の一回だけにラテン語の表記が出てくる。この様子から、外国人側は毎回ラテン語 (スペイン語のように発音しても、この場合はラテン語と一緒にである) のようにxを発音していたが、筆者がxp (つまりcsp) の三つの子音を正確に聞き取れなかった可能性が窺われる。

三. いくつかの音節の表記について

三・1 ce, ci

仮名本語の元の綴りを調べたところ、ce, ciの音節を含む語がそれぞれ39語（延べ253例）と79語（延べ531例）ある。全ての例においてこれらの音節はサ行のセ、シとポルトガル語式に読まれている。ラテン語特有の歯茎摩擦音（現代日本語のチェ、チにあたる）の読み方が見られる例はヒツチア（fiduccia, ラ、1例）で、一つあるように思えるが、この表記は二重子音ccを反映しており、この場合「ccia」はポルトガル語でも摩擦音となるため、例外にはならない。

この中で、明らかにラテン語の綴りに基づいている例がある。これらを表2に掲載した。

表2

番号	表現	ラテン語	ポルトガル語	スペイン語
1	シルクンスベソシヨ	circumspectio	circunspeção	circunspeccion
2	トシリタス	docilitas	docilidade	docilidad
3	エスヒリシテ	explicite	explicitamente	explicitamente
4	インヒリシテ	implicite	implicitamente	implicitamente
5	ラルカニシアニマ	organici anima	alma organica	anima organica
6	ヘルアシテンス	per accidens	por accidente	por accidente
7	シンヒリシテル	simpliciter	simplesmente	simplemente
8	ソリシツウト	solicitude	solicitude	solicitud
9	スヘシエス	species	especie	especie
10	ススヒイシヨ	suspicio	suspeição	susplicacia

表2の表現以外に、ce, ciの発音を除くとポルトガル語とラテン語の発音が共通する表現は22例ある。ceの39語とciの79語を合計して、表2のラテン語10語とラ・ポ共通形22語を引くと、残りの86例はポルトガル語である。表2にある、綴りが明らかにラテン語である表現の場合でも、ciとceは一般にラテン語式ではなく、歯茎摩擦音として発音されたことになる。つまり、これらの本語はもともとラテン語であるにもかかわらず、ポルトガル語のように扱われたのである。

表2のラテン語を含めて、合計の118語（延べ784例）の全てにおいてce,ciがサ行音のセ、シとなっている。これらの784例ではceとciの表記に一度も揺れがないという事態から、筆記者がce、ciを破擦音と聞いて、一律に誤りなくすべてをポルトガル語的な読み方に変えたとは考えにくい。この発音は、筆記者に本語を提供したラモン師もしくはラモン師の和訳を伝えたヨーロッパ人宣教師のものとはしか考えられない。

ところで、330オに、Mentis чычитасという奇妙な表記の語がある。ラテン語版と比較した結果、これはMentis cæcitas（理性の盲目）に当たる。cæcitasにはcæとciの両方が出てくる。ceとciを表記するために用いられた文字を見ると、これはギリシャ語文字ではなく、キリル文字「ч」である（現代のスラブ系の言葉では、この文字の発音は歯茎破擦音[tʃ]である）。もう一つ特殊な字がラテン語の二重母音æのために用いられているのはキリル文字「ы」。

このような文字で書かれた例は他に一カ所ある（362オに「κλύμνπια」clementia）。拙稿「成立について」（p.13）で日本語版におけるローマ字の筆跡がイ、ロ、ハの3種類あると指摘したが、両方の本語の前後はヨーロッパ人によるとと思われるロの筆跡である。

これらの二例が本書に存在する意味を検討してみる。このような記号はラテン語版に一例も出てこない。その上、cæcitasもclementiaもラテン語で、ギリシャ語の借用語でない。したがって、このような文字で書かれる意味があるとすれば、それはローマ字では紛らわしい発音の特徴を示すために違いない。つまり、このキリル文字を交えたギリシャ語文字はある種の音声表記のために用いられているのではないかと推定される。

この中で、「ы」と「ч」が出てくる。前者に関しては、ラテン語のe（長音）、e（短音）と二重母音æに対して用いられることが以上の二例から分かる。чычитас（cæcitas）に関して、あえて「ч」が用いられたのは、ラテン語の発音規範を示すためではないかと考えられる（そして、ギリシャとキリルの難解な文字が用いられたのは、これらの文字が、日本語版の筆記や書写に関わる者の意図に従って勝手に改められないようにするためかもしれない）。つまり、これらの本語を筆記したロの筆跡の持ち主（おそらくヨーロッパ人）は、適切に思えた発音をこの形で確保するため、わざとこのような見慣れない文字を用いたのではないかと考えられる。拙稿「ローマ字本語について」（p.19）では、ロの筆跡にスペイン語の語も存在すると指摘した。あるいはこの筆跡の持ち主がラモ

ン師自身であった可能性もあるが、ceとciの表記に用いられているセとシは、これらの文字で規範とする発音を正確に写したものではないだろう。

三・2 語尾-tia (potentia, substantia)

母音もしくは鼻音に後続するtiaはラテン語の抽象名詞によく出てくる語尾で、ラテン語ではtは歯茎破裂音に発音される。この語末をもつラテン語がポルトガル語、スペイン語に受け入れられると、tiaが摩擦音-cia（発音は[-sia]）になる場合が多い。

例：potentia（ラ） > potencia（ポ、ス）

発音の上で、ラテン語の形とポルトガル語やスペイン語の形は語尾の-tiaが[-tia]と[-sia]と異なっている以外は差がない。

ti自体が三・1のce、ciのようにどこでも摩擦音で読まれるわけではない。母音aとoに先行する場合以外、tiはチと表記されているからである。

例：アヒルマチイワ（affirmativa ラ・ポ共通、肯定的）

アルチイシモ（altissimo ポ、最高の）

ラテン語temperantiaに当たるポルトガル語はtemperançaで、スペイン語はtemperanciaである。日本語版にはテンペランサの1例と、テンペランシアの11例と、両方の形が出てくる。テンペランシアの場合、読み方はラテン語の「tia」の[tj]を摩擦音[j]としているか、スペイン語を写しているようにも考えられる。

ラテン語justitia（ポjustiça、スjusticia）の仮名表記では、語尾が省略されている例と誤写の例を除くと、単独語で64例、そして二語熟語では40例がある。41例あるシユスチイシアが中心となり、シユスチシア、シユスチシヤ、シユスチイシヤの揺れがあるが、すべての例において語末は「シア」か「シヤ」になっており、ポルトガル語の表記にあたる「シユスチサ」は一例もない。

ラテン語とポルトガル語が明らかに異なる単語もある。たとえば、ラテン語sapientiaに当たるポルトガル語はsabedoria（スペイン語ではsabiduría）であるので、仮名表記で出てくるサヒエンシアがラテン語の綴りを反映しているのは明らかである。にもかかわらず、-tiaに当たる仮名はチアではなく、摩擦音のシアとなっているから、ラテン語sapientiaがポルトガル語、もしくはスペイン語であるかのように捉えられて発音されていたことが分かる。

上記の例を含み、ポルトガル語でtiaを含まない例を表3にまとめた。

表3

番号	日本語版の例	羅語	葡語	西語	該当言語
1	フルテンシアカルニス	prudentia carnis	prudencia da carne	prudencia dela carne	×
2	チリスチイシア	tristitia	tristeza	tristeza	×
3	サヒエンシア	sapientia	sabiduria	sabedoria	×
4	アミシシア	amicitia	amizade	amistad	×
5	シユスチイシア	justitia	justiça	justicia	スペイン語
6	インシユスチイシヤ	injustitia	injustiça	injusticia	スペイン語
7	テンヘランシア	temperantia	temperança	temperancia	スペイン語
8	インテンヘランシア	intemperantia	intemperança	intemperancia	スペイン語

表3の例にある語形は、表現全体からラテン語に基づいていると考えるべきであろう。しかし、この場合にも、語尾-tiaの表記はラテン語の発音に基づいた「チア」ではない。tiaの表記が「シア」となっている原因に関しては、解釈は二つ考えられる。

(1) ラテン語における語末の「tia」の発音は厳密に仮名で反映できない音であったこと。中世以降のラテン語では、語末のtiaやtioのtiが前舌歯基破擦音の[tsi]と発音されることがある⁽¹¹⁾。この音は仮名の一字では厳密に表せないが、もし一字で表そうとするならば、破擦音の「チ」か摩擦音の「シ」しかない。両方とも歯基破擦音から離れており、なぜ「チ」の例が一つもないのかは説明しにくい。したがって、この可能性は低いものと見られる。

(2) これらの語はポルトガル語、もしくはスペイン語として扱われたこと。前述した如く、ラテン語でtiaに終わる語は、ポルトガル語やスペイン語では語末がciaに変わること以外相違点がない場合が多い。ポルトガル語では子音連続の一部が簡素化されるが、スペイン語ではこの現象も少ないため、語末の綴りと発音の変化以外ラテン語に似た語形がポルトガル語よりも多い。この意識が働いて、もともとラテン語の綴りであった語がポルトガル語（ごく一部スペイン語）であるかのように表記されたことになる。

この場合に、ヨーロッパ人宣教師がラテン語をスペイン語風に発音していたことによるか、それとも筆記者がラテン語の発音をポルトガル語に転じたことによるかについて考える。仮に、ヨーロッパ人宣教師が語尾-tiaをラテン語の

一般の発音をしたとすると、たとえば*justitia*の場合には、発音は「ジュスティチア」のようなものと推定される。日本語版では表記の揺れがたくさん見られ、本稿で*ct*、*bst*の場合で見たように、宣教師がラテン語の完全な語形を提供したとすると、少なくとも何カ所かにラテン語の発音を反映する「チア」が見られるはずである。しかし、ラテン語の綴りで*tia*を含む語や表現は全体で97語（延べ1,070例）あるが、「チア」の例が一つもなく、全ての例で*tia*が「シア」に表記されている。それは、*t*が本当に摩擦音として発音されたために違いない。ゆえに、この表記はヨーロッパ人宣教師の発音（あるいは、ある種の訛り）によると見るべきであろう。

どちらの解釈にしても、三・1でも見たように、ラテン語の場合にも*tia*が「シア」と読まれている事象は筆記者の判断によるとはいえない。

三・3 語尾-tio(*satisfactio*, *adoratio*)

本節では、ラテン語の語末*tio*に関連する表記を考察する。

語尾-*io*に終わるラテン語の多くの場合、ポルトガル語ではこれが-*ão*（発音は[-am]）に変化する（この語尾は読み方こそ違うものの、表記上スペイン語、フランス語、英語などでは-*ion*になっている）。この語尾を持つラテン語の言葉は現在の諸言語でも多く用いられ、文語や専門語に多い。

変化としては、いくつかの種類ある。

例：-*tio*→-*ção* (*detractio* vs. *detração*)

-*sio*→-*ção* (*confessio* vs. *confissão*)

-*gio*→-*gião* (*religio* vs. *religião*)

-*nio*→-*nião* (*unio* vs. *união*)

以上の変化に共通している-*io*は、ポルトガル語で-*ão*、スペイン語で-*ion*になっているので、仮名表記から原語の識別は簡単に出来る。ポルトガル語式の表記が出てくる例が最も多く、ラテン語やスペイン語式の表記の例は数例しかない。

-*tio* (-*ção*) に焦点を当てると、日本語版では、ポルトガル語の語尾「ーサン」という仮名表記を持つ表現が64例（延べ664例）あって、スペイン語の「ーシヨン」を持つ語が1つ（延べ1例）ある。「シヨ」に終わる語は36語で157例あるが、元のラテン語の綴りが*tio*に終わるのに対して、仮名表記では語尾が「ーシ

ヨ」となっており、ラテン語の発音を反映すると思われる「チヨ」の例は一つもない。つまり、前節の-tiaと同様、tiがラテン語の発音に当たる「チ」ではなく、「シ」と表記されている。

前節のtiaの場合にはラテン語とポルトガル語やスペイン語の発音は近似しているから、tiaが「シア」に表記されている原因をヨーロッパ人の発音の訛のような特徴として考えたが、この場合にはポルトガル語やスペイン語の語形と発音が異なっているため、前節で考えた(1)の単純な発音の癖では説明しきれない。

しかし、ラテン語のtioの語尾とは無関係だが、ポルトガル語には「cio」に終わる語がある。日本語版に次のような語がある。

例：シリシヨ (cilicio 修行衣) 4例

サキリヒイシヨ (sacrificio 犠牲) 93例

また、ポルトガル語では語末が-çãoにならないがラテン語で-cioに終わる語もある。

例：シユチイシヨ (judicio 裁判、2例) cf. シユイゾ (juizo)

tioをcioに変える現象はこれらの形からの類推と考えることができる。ところで、これらの形の語尾cioも、三・1で見たように、ラテン語では破擦音を含み、仮名では「チヨ」にふさわしいのに、このような例は一つもない。またラテン語の語末tioが「チヨ」になっている例が一つもないことを考えると、語末の類推があったとしても、tioが「シヨ」と表記されている原因は、ヨーロッパ人宣教師の発音にあることになる。

これらの語のもう一つの特徴としては、複数の言語に基づいた形による揺れがある点がある。二言語以上に基づくことによって、語形の揺れが著しい例を表4に挙げた。それぞれの語形に該当する推定仮名表記をあげたが、ce, ciまたtioをサ行音として表記しておいた。

表4

講義要綱の例	ラテン語綴り (推定仮名表記)	ポルトガル語綴り (推定仮名表記)	スペイン語表記 (推定仮名表記)	該当原語
エスコムニヨ エスコムニアン エスコムニカサン	Excommunicatio (エキスコムニカ シヨ)	Excomunião (エスコムニアン)	excomunion (エクスコムニヨ ン)	× ポ ×
テスヘランサ テスヘラサン テスヘラシヨ	desperatio (テスヘラシヨ)	desperação (テスヘラサン)	desesperacion (テスヘラシヨン)	× ポ ラ
アトラシヨ アトラサン	adoratio (アトラシヨ)	adoração (アトラサン)	adoracion (アトラシヨン)	ラ ポ
セネラサン セラサン	Generatio (ゼネラシヨ)	Geração (ゼラサン)	generacion (ゼネラシヨン)	× ポ
ラシヨ ラサン	Ratio (ラシヨ)	rezão, razão (レザン)	racion ラシヨン	ラ ポ

表4から分かるように、一語に対して、様々な形が出てくる。ポルトガル語あるいはラテン語の綴りに関係していると断定できる場合があるが、どの言語にもない形も見られる。

たとえば、「エスコムニカサン」はラテン語のexcommunicatio（推定仮名表記エスコムニカシヨ）から語尾をポルトガル語風に変えられたようである。テスヘラシヨ、アトラシヨをサキリヒイシヨ、シリイシヨからの類推と考えることができる。

テスヘランサ（絶望）は、ラテン語desperatioをポルトガル語に直すため、ポルトガル語におけるその反義語esperança（エスヘランサ）と対立させた上、語頭des-を反義語の造語に用いられる接頭辞des-と類推したものを見ることができる。

つまり、これらの例を一つ一つ考えるとヨーロッパ人がラテン語からポルトガル語に直そうとした結果できあがった形と見ることもできるが、全てを見ると、表4の形に対応するポルトガル語が存在していたにもかかわらず、ラテン語の形を中途半端に遵守するような数種類の形が生じている。この様子から、本語をポルトガル語に変える意図は認められるが、これはもともとラテン語で

書かれた本語がその場で臨機応変にポルトガル語風に変えられただけであろう。「ローマ字本語について」の結論でも、日本語版の原本にスペイン人がかわった可能性を指摘したが、表4の形から見ても、筆記者に発音の形を提供したヨーロッパ人がポルトガル語を母国語としていなかったことが窺われる。

四. おわりに

本稿第二章で見たように、ラテン語の子音連続の表記例には、いずれかの（特に前項の）子音を脱落させる場合と表記する場合があり、同一語の表記の揺れも見られる。この事態から、筆記者に発音の形を提供したと思われるヨーロッパ人はこれらの子音連続をラテン語もしくはスペイン語にあるような完全な形で発音したが、日本語で聞き慣れないこれらの音を筆記者が聞こえたように記そうとした結果、揺れが生じている可能性があると考えた。

第三章で検討した表記の特徴は筆記者によるのではなく、筆記者に本語の発音を提供したヨーロッパ人によるようである。このヨーロッパ人は、ラテン語の語形をポルトガル語風に発音して、語尾をポルトガル風に変える意図が明らかであるが、ポルトガル人ではなかった可能性が高い。そもそも、子音連続の表記には、ポルトガル語にない、ラテン語もしくはスペイン語の発音を反映する例があり、またce、ciの表記、語尾の変化や語形の揺れにはラテン語にない、ポルトガル語とスペイン語の形が関わっている。つまり、スペイン語がこれらの事象に共通している。この状況から、筆記者に発音を提供したヨーロッパ人宣教師がスペイン人であったと考えることができる。このスペイン人がラモン師自身であった可能性もあるが、スペイン人が、ラテン語の形を、さほど詳しくないと見えるポルトガル語に変えなければならなかった理由を考えると、ヨーロッパ人と日本人の筆記者のやりとりにあたっただけか、それともっと一般的に、当時の私文の文章の作成にあたっただけか、本語を使用する限りはポルトガル語が一種の共通語となっていた可能性が十分にある。

〈注〉

- (1) 『国語国文』、第71巻第10号。
- (2) 『国語国文』、第72巻第6号。
- (3) 『國文學論叢』、第10号。

- (4) 『國文學論叢』、第9号.
- (5) 国原吉之助氏『中世ラテン語入門』、p.39.
- (6) Alvarezのラテン語文法 (Alvarez, Emmanuel "De Institutione Grammatica", Ioannes Barrerius, Olyssippon, 1572) によると、consonas mutæは8つあって、それらはb c d g k p q t、いずれも破裂音である。それに対し、semiuocalesがf, l, m, n, r, s, x, zとまた8つある (p.197)。この分類はダンジェル著「ラテン語の歴史」におけるものと合致している。従って、その和訳に用いられる破裂音という名称を採用するが、発音されない意味の破裂音ではない。またsemiuocalesも現在用いられている半母音の意味ではない。
- (7) Toru Maruyama, "KEYWORD-IN-CONTEXT INDEX OF THE GRAMMATICA DA LINGOAGEM PORTUGUESA(1536) BY FERNÃO DE OLIVEYRA" Nanzan University, 2001, Nagoya, p.23.
- (8) Rodrigues, João "Arte Da Lingoa de Japam", Amacusa, 1604, 6v.
- (9) MARUYAMA, Toru "KEYWORD-IN-CONTEXT INDEX OF THE REGRAS QUE ENSINAM A MANEIRA DE ESCREVER EA ORTHOGRAPHIA DA LINGUA PORTUGUESA(1574) BY PERO DE MAGALHAËS DE GANDAVO" Nanzan University, Nagoya, Japan, 2001, p.10.
- (10) As syllabas xa, xe, xi, xo, xu se ande pronúciar como no Portugues, quando dizemos xaque, almoxarise, prixe, perixil , queixo &c, & não como no Latim com, c s, nem como em algúas partes de Europe onde se pronunçiã guturalmente.(p. 61v)
- (11) ジャクリーヌ・ダンジェル著、遠山一郎、高田大介訳『中世ラテン語』文庫クセジュ、白水社、東京、2001年、p.98.

参考文献

- 1.尾原悟編著『Compendium Catholicæ Veritatis』大空社、東京、1997.
- 2.尾原悟編著『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』大空社、東京、1997.
- 3.Alvarez, Emmanuel "De Institutione Grammatica", Ioannes Barrerius, Olyssippon, 1572.
- 4.Buarque Da Holanda Ferreira, Aurelio: "Dicionario Aurelio", Editora Nova Fronteira, Rio de Janeiro, 1975.
- 5.Figueiredo, Candido de ~ "Grande Dicionario", Lisboa, 1947, 2 vol.
- 6.Figueiredo, Candido de ~ "Novo Dicionario", Livraria Bertrand, Lisboa, 1939, 2 vol.

7. MARUYAMA, Toru "KEYWORD-IN-CONTEXT INDEX OF THE GRAMMATICA DA LINGOAGEM PORTUGUESA (1536) BY FERNÃO DE OLIVEIRA" Nanzan University, Nagoya, Japan, 2001.
8. MARUYAMA, Toru "KEYWORD-IN-CONTEXT INDEX OF THE REGRAS QUE ENSINAM A MANEIRA DE ESCRIVER EA ORTHOGRAPHIA DA LINGUA PORTUGUESA(1574) BY PERO DE MAGALHAËS DE GANDAVO" Nanzan University, Nagoya, Japan, 2001.
9. Rodriguez, João "Arte Da Lingoa de Japan" Nagasaki, 1604,写真版、京都大学文学研究科国語学国文学研究室所蔵。
10. "DICTIONARIUM LATINO LVSITANICVM AC IAPONICVM" (「羅葡日対訳辞書」(1595)) 勉誠社、東京、1979.
11. ジャクリーヌ・ダンジェル著、遠山一郎、高田大介訳『中世ラテン語』文庫クセジュ、白水社、東京、2001.
12. 国原吉之助『中世ラテン語入門』、南江堂、東京、1975.
13. 尾原悟編著「イエズス会日本コレジヨの講義要綱」三卷、『キリシタン研究第34～35輯』教文館、東京、1998－1999.

(ポペスク フロリン・研修員)